

偲び草

早村 春鶴

諏訪からの句便り途絶へ五月雨^{さみだ}るる

初夏の朝諏訪の句友の訃報来る

句友逝く木曾路は遠し木下^{こした}闇

酒演歌好む筆友^{とも}逝く五月闇

短日や諏訪の湖畔の阿弥陀佛

(一谷春窓先生のご冥福を祈りて作りし句)

麦 秋

山本 春英

筍の皮むき競ふ孫兄弟

焼鳥屋店先行列初夏の宵

麦秋やサイクリングの列長^{さかん}し

蠶豆^{そらめ}は七父^{ちち}の好みし肴^{さかな}なり

雨止んで小さき若葉みつれたり

初 夏

森本 智子

女子学生一つ結びへ初夏の風

筍を掘るが楽しいという友と

恒例^{こうれい}のどつと寄り合ふ溝^{みぞ}凌

大小の波紋残して島帰る

田植終へ引き上ぐ泥の車跡^{くるまあと}

芍 薬

坂井 白萩

薔薇の名を讀めて幼子得意顔

筍に二人住まいの小さき鍋

信号に停まりて知りし花^{※はな}栲^{はなわうち}

日暮れて酢漿^{かたばみ}の花閉じにけり

芍薬に思い起こせし母の庭

※花^{はな}栲^{わうち}

花棟^{あふち}とも書く。梅檀^{せんたん}の花のこと。

花は小さいが香り良く、「梅檀は双葉より芳し」といわれている。

